

---

---

## ASMRによる肥満表象——おぞましさと快樂の交錯をめぐって

宮内沙也佳 (立命館大学)

---

---

いわゆる「肥満」は、しばしば「おぞましい」身体として表象されてきた。なかでも過剰な脂肪を纏う「超肥満」がフリークスとして見世物にされてきた文脈に加え、「障害」としてケアされる存在であると位置づける文脈から語られるようになって久しい。しかし、このような肥満表象を再考する議論もなされてきた。すなわち、美醜や規範／非規範性といった観点から肥満表象の攪乱性や支配的イデオロギーの転覆可能性を読み取るものである (Lesleigh Owen “Monstrous Freedom: Charting Fat Ambivalence” 2015)。このように肥満やその表象が「不快」な身体として位置づけられてきた他方で、「快」へ結びつけるフェティシズムの観点からの議論もある (Angela Jones “The pleasures of fetishization: BBW erotic webcam performers, empowerment, and pleasure” 2018)。映画における肥満表象は食事と切っては離せない存在として描かれる。例えば映画『人生狂騒曲』(1983) や『ザ・ホエール』(2022) で強調される食事シーンでは、爆食する肥満表象と咀嚼音に焦点が置かれた空間を見ることができる。

近年、ASMR (autonomous sensory meridian response) なる視覚と聴覚に心地よい刺激を届ける感覚的メディアが動画投稿サイトなどで流行している。例として食事中の咀嚼音や耳かきをテーマにしたものがある。食事風景の ASMR 動画では、フードファイターやぽっちゃりアイドルといったクリエイターによる発信も散見される。ASMR で重要な道具としてイヤホンが注目され、情動論の文脈において外部が内部に介入しうることが指摘されているが (野澤俊介「導体になること——情動、交感、ASMR」2024)、ASMR は、単なる媒体であるだけでなく、これまで「不快」とされてきた感覚や身体性までも快の文脈で再編成する力をもっているといえよう。とりわけ、食事や皮膚のこすれといった従来なら忌避の対象であったシーンを「過剰」に「生々しさ」を伴って表象することで癒しや没入感をもたらす媒体として享受されている点は注目に値する。

ASMR の流行により、肥満表象は不快の象徴であると同時に快の媒体として機能するような感覚的両義性を帯びた存在として新たに解釈することができるだろう。さらに、これまで「ケアされる存在」として描かれてきた肥満身体が、ASMR 的な文脈においては視聴者に快や安らぎを提供する「ケアする存在」へと転じる契機をもつ。本発表は感性論としての美学の範疇として、このような快／不快の両立と、感覚における主客関係の転換を、映画作品における食事シーンと肥満表象の分析を通じて明らかにする。